

【7】摩訶波闍波提の入滅

[0] 最後に摩訶波闍波提の入滅について検討する。

[1] これに関する資料には次のようなものがある。

[1-1] A文献資料には次のようなものがある。

- (1) 釈尊は毘舍離普會講堂所におられた。大愛道は諸比丘が「如來は久しからずして、滅度を取りたまふべし。三月を過ぎずして拘夷那竭の娑羅双樹の間に在すべし」と述べるのを聞く。その時大愛道は「如來の滅度を見るのは堪えられない。また阿難の滅度を見るのも堪えられない」と考え、釈尊のところへ行き「自分が先に滅度を取るのを許してほしい」と願い出た。釈尊は黙然として許された。差摩比丘尼等 500 人の比丘尼も同様に願い出て許された。大愛道は虚空中に座臥經行等の神通を示して滅度を取り、500 人の比丘尼も同様にして滅度を取った。釈尊は、阿難・難陀・羅云等を將いて大愛道比丘尼の寺中に至り、自ら舍利を供養され「一切行無常、生者必有尽、不生即不死、此滅為最樂」と偈を唱えられた。『増一阿含』052-001 (大正 02 p.821 中)
- (2) 釈尊は墮舍利国獼猴水拘羅曷講堂におられた。そのとき摩訶卑耶和題俱曇彌は 500 人の比丘尼と墮舍利国比丘尼精舎にいたが、「不忍見仏般泥洹並阿難舍利弗目連是賢者輩、我先捨壽命行取泥洹去」と考え、仏所に至り許しを乞い釈尊は黙然として許された。500 人の比丘尼も同じく許された。彼女たちは「これが釈尊にお目にかかる最後です」と申し上げて比丘尼精舎に戻り、諸々の神通を示して入滅した。釈尊は舍利弗以下千阿羅漢と共に母人聚舍利を供養し起塔させた。『大愛道般泥洹經』(大正 02 p.867 上)
- (3) 釈尊は維耶離国獼猴水辺拘羅曷講堂におられた。大愛道比丘尼は除饑女 500 人と共に維耶離国王園所の精舎にいたが、禪定中に世尊、阿難、鷲鷲子、大目乾連の滅度の日が近いことを知って「自分は堪えられない、自分が先に入滅したい」と考え仏所に至り願い出て許された。五百除饑女も同じく許された。彼女たちは「今後お目にかかることはありません」と申し上げ精舎に戻り、神通を現して同時に入滅した。釈尊は比丘達と大愛道舍利所に行かれ供養して起廟させた。『仏母般泥洹經』(大正 02 p.869 中)

[1-2] B文献資料には次のようなものがある。

- (1) 世尊がヴェーサーリーの大林重閣講堂におられた時、勝者の叔母マハーゴータミーに「仏の般涅槃も、舍利弗・目連やラーフラ、阿難、難陀の般涅槃も見るには堪えられない、自分が先に入滅したい」という思いが生じた。ケーマーなど 500 人の比丘尼も同じ思いであった。そこで彼女たちは仏所に來詣し先に入滅することの許しを乞うた。それからラーフラ、阿難、難陀に別れの挨拶をした。比丘尼住所に戻り種々の神通を示して「自分は生まれて 120 歳になり、これだけで十分です」と告げて入滅した。釈尊は阿難達と葬堆に行き供養された。Apadāna 004-002-017 (p.529)
- (2) 仏が劫比羅城多根樹園におられた時、大世主苾芻尼は「仏於衆中讚歎和合、乃至大師現住於世苾芻僧衆復未乖離、我今宜可入於涅槃」と考え、仏所に詣り「我今意欲疾入涅槃」と申し上げた。仏は「涅槃のためにこの語をなす者には今更言うことはない、諸行無常悉皆如是」と答えられた。五百苾芻尼も同様に申しあげて同様の答えをもらった。

- 彼女らは大歡喜して、難陀・阿尼盧陀・羅睺羅・阿難陀・乃至諸上座の所を詣って、住処本寺に戻った。それから七日間說法し、神通を現じて、入定般涅槃した。……仏は「汝ら、これを看よ、大世主喬答彌は寿百二十歳たりながら、身に老相なきこと十六歳の童女のごとくなるを」と言われた。『根本有部律』「雜事」（大正 24 p.248 上）
- (3) 仏之姨母瞿曇彌比丘尼將入涅槃時、種種莊嚴欲令勝妙。……爾時瞿曇彌比丘尼作是念、我不欲見仏入涅槃、我応在前入於涅槃。同時に出家した 500 比丘尼と共に仏所に往詣し、釈尊の許しを得て閑静処に入り、大神變を現じて入滅した。釈尊は舍利弗、目連、難陀、羅睺羅、阿那律、阿難等を従えて供養された。『大莊嚴論經』（大正 04 p.333 上）
- (4) (留多寿行の説明の中で) 大生主為首五百苾芻尼、留多命行捨多寿行。『大毘婆沙論』（大正 27 p.656 上）
- (5) 大生主為上首五百苾芻尼、於一日中俱捨寿行而般涅槃。『大毘婆沙論』（大正 27 p.896 中）

[2] A 文献資料の〈1〉〈2〉〈3〉と、B 文献資料の〈1〉は、摩訶波闍波提が釈尊がヴェーサーリーにおられたときに、3ヶ月後に入滅することを決意されたことを聞いて、それに先立って入滅したいと釈尊に申し出て、許されたとしている。そして B 文献資料の〈1〉〈2〉によればこれは彼女の 120 歳の時であった。しかしこの 120 歳は長寿を表す際の決まり文句であって信じるに足らない。

またこの伝承は、この時摩訶波闍波提は釈尊のみならず、舍利弗・目連も阿難もあるいは難陀にも先立って入滅したいと申し出、その時同時に 500 人の釈女も入滅したとする。釈尊や舍利弗・目連の名が上げられるのは分からないでもないが、阿難や難陀やあるいはラーフラが上げられるのは不自然としか言い様がない。500 人の釈女が同時に入滅したというのも信じがたい。

要するにこの伝承全体が信じがたいということにならざるを得ないが、水準は必ずしも高くはないとはいえ、パーリと漢訳に共通する伝承であるから、無視するわけにはいかないであろう。

ということになれば、これは「涅槃經」に描かれる釈尊の入滅のシーンを下敷きにしているのであるから、この伝承によるかぎり摩訶波闍波提は釈尊の入滅の年に亡くなったということになる。彼女は釈尊よりも 12 歳の年長であったとすれば、この時釈尊は満 80 歳の誕生日を迎えられたのであるから、彼女は 92 歳であったことになる。また彼女はヴェーサーリーにおられた釈尊を訪ねて入滅の許可をもらったとすれば、彼女もヴェーサーリーにいたことになるから、入滅の地はヴェーサーリーということになる。